

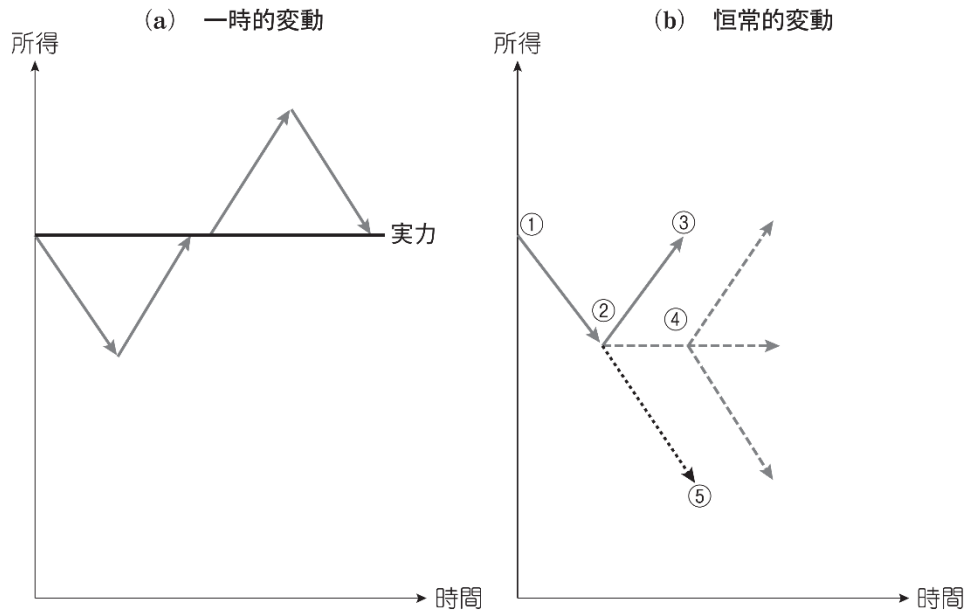
### ウェブコラム③ 景気循環の統計的性質と安定化政策

景気循環の主因を何に求めるかについて、経済学者の間には意見の相違がある。本文で記したケインズ経済学の立場、貨幣供給の変動を考えるマネタリスト、技術進歩など実物的側面を重視する実物景気循環理論などが代表として挙げられる。しかし、景気循環に関する近年の議論を理解するためには、具体的な原因も重要だが、原因の統計的性質について理解することが有益である。

卑近な例としてスポーツ選手の成績を想像するとわかりやすい。ある選手の成績が芳しくないとき、成績下降の原因をどのように考えればよいだろうか。最近のマクロ経済学が注目する点は、変化が一時的変動によるのか、それとも恒常的変動によるのか、ということである。一時的変動とは時間の経過とともに消えていくものであり、スポーツ選手の一時的なスランプが当てはまる。それに対して、恒常的変動とはいったん生じると決して消失しないものであり、スポーツ選手の例で言えば深刻な故障や加齢に伴う衰えが当てはまる。

一時的変動が支配的な場合、所得の変動は図 A のようにとらえることができる。すなわち、所得の減少は実力からの下方への乖離であり、所得水準はいずれ実力に回帰する。また、所得は実力の上方へ乖離することもあるが、それもいずれ実力に回帰する。伝統的な景気循環のとらえ方はこのようなものであり、ケインズ経済学の想定も図 A (a) にあったと考えられる。これに対して、恒常的変動が支配的な場合、所得の減少は持ち直すとは限らない。図 A (b) のように、当初の①から②へ所得が低下すると、次に②が出発点となり、③④⑤のいずれが実現するのかは確率的にしかわからない。これがランダム・ウォーク過程である。

図 A 一時的変動と恒常的変動



実物景気循環理論は、景気循環がランダム・ウォーク過程に従っており、その過程がマクロ経済の実力の変動にほかならないと考える立場である。この理論の想定を単純に信じると、経済は常に均衡にあるから安定化政策は不要であるとの結論が導かれる。もちろん、この結論に対しては多くの批判がある。たとえば、その後の実証分析では景気循環にとって一時的変動のウェイトは無視できないとの報告もある。また、仮に均衡の変動によって景気循環を説明できるとしても、すでに学んできたように外部性など市場の失敗が存在するときには均衡はパレート最適性を保証しない。このような状況では、依然として政府介入の余地がある。

ただし、政府の介入手段は必ずしも財政政策（財政による経済政策）に限定されない。近年、アメリカを中心に、安定化政策が必要だとしても金融政策（中央銀行による経済政策）に任せるべきであるとするマクロ経済学者が増えている。